

「世間」とは何か？

～一橋大学名誉教授・阿部謹也さん講演会にちなんで～

「好ましいことではないが、今の世の中では仕方がない」=23.8%

何の数字かわかりますか？

「結婚の時に、結婚相手やその家族が同和地区出身かどうか調べることをどう思いますか」とたずねた時、小郡市民のほぼ4人に1人は「世間」に負けて身元調査を許してしまうという実態を表した数字です。（01年11月実施の小郡市同和问题意識調査の結果より）

いろいろな学習を通し「差別はしたくない」という気持ちが芽生えても、その気持ちを押し殺させ、人権侵害につながることをさせてしまう「世間」。そうであるなら、差別をなくすためには、「世間」というものをどう考え、どう行動したらいいのでしょうか？

「人権・同和问题と世間」

そこで人権センターでは去る3月5日(日)、「世間」について詳しい一橋大学名誉教授の阿部謹也さんをお迎えし、「人権・同和问题と世間」というタイトルでお話をさせていただきました。若干専門的な内容なので参加が少ないのではと心配していましたが、そんな不安に反して市外の方も含め60名以上の方々にご参加いただきました。



阿部先生は、約1時間半にわたり、

- ◆ 明治以前、日本には西歐的な個人は存在せず、個人は「世間」に含まれていたこと
 - ◆ 明治以後、制度・行政などは近代化できたが、家庭等の人間関係に「世間」が生き残ったこと
 - ◆ 近代化社会が論理、文字で動くのに対し、「世間」は義理・人情、会話で動くこと
 - ◆ 「世間」とは、「贈与互酬の関係」「長幼の序」「共通の時間」で成立していること
 - ◆ 「世間」と差別の関係
- などについてお話しくれました。

阿部先生からのメッセージ

講演会を終えると休む間もなくすぐに東京に帰られた阿部先生でしたが、車で福岡空港にお送りする車中でいただいたメッセージを、次ページにご紹介します。

「差別はひとのためになくすものではありません。それを感じた人自身がその不条理を解決せざるをえないのです。しかし本人以外にもできることはあります。それは自分も、自分の感じている不条理を打ち明けることです。そのことは、世間への不満を言うことになりますから、なかなか言いにくいことかもしれません。しかしそうだからこそ、それを言う勇気が人を励ますのでしよう。こうしたことが「世間」の不条理、すなわち差別をなくしていくことにつながるでしょう。」

参加者の声から… (※ アンケートより一部抜粋)

- * 私は大学生なのですが、大学内部の世間についての話題には多くの驚きがありました。特に、序列や人事についての話は目からうろこが落ちる気分でした。教育と研究のある大学にも多くのしごらみがあることを実感させていただきました。 <20才未満・男性>
- * 「人権」という言葉がタテマエの言葉になってしまっているという提起がズシンと心に響きました。自分がどの世間に属しているのか、しっかり見極める必要性や、世間の価値観にはほんろうされたくないような自己の中の価値観の確立が必要なのでは。 <30代・男性>
- * 大変興味深く聞くことができました。日本は、ヨーロッパの個人というものがなく名前だけで、世間が動かしているということ、日本の社会のシステムがよくわかりました。今日の話聞いて、人権・同和教育をすすめていくためにどうしていくべきかなど考えさせられました。 <40代・女性>
- * 「世間とは何か」を読み、一度は話をうかがいたいと思って念願がかなった思いです。世間をつきくずすことのやっかいさ、親鸞の思想、共感できることばかりでした。世間の中にある不合理なことをなくす一人として、今後も知恵をしぼります。 <50代・女性>
- * 久しぶりに学生になったような気がしましたが、先生のお話は少しわかったような気がします。今後またお話を聞きたい。世間についてもっと知りたい。 <60才以上・男性>

(文：有田)

ほんよみ 読書ノート

阿部謹也 著
「世間」とは何か



1995年 講談社現代新書

阿部さんはたくさんの本を書かれていますが、その中から1冊。本書では、『万葉集』を出発点に、『徒然草』の吉田兼好、浄土真宗創始者の親鸞、『好色一代男』の井原西鶴、『破戒』の島崎藤村、『坊っちゃん』の夏目漱石、『断腸亭日乗』の永井荷風、『鮫』の金子光晴といった、私たちになじみ深い人たちが登場し、タイトルの通り「世間」がどんなものかということについて、教えてください。

ひとの恋路を邪魔する世間。迷信でひとを惑わす世間。いただき物をしたら必ずお返しをしなければならない世間。知ったかぶりをさせる世間などなど、詳しくは読んでのお楽しみ。

「世間」を知らなければ、自分の生き方が「世間」にどう影響するか、部落差別をはじめとする差別をなくすことに本当につながっているかどうかさえ分からないのではないのでしょうか。

読んでおきたい一冊です。

(文：羽江)

情報と私たちの暮らし

昨年末、知人の青年Aさんがセンターを訪れました。「友達からこんなメールが来たけれど、本当だろうか。」ということです。友達（Bさん）から来たというメールは次のような内容でした。

友達のC君の妹がその友達から聞いた話なんだけど、その人が福岡の繁華街でお金に困っていたアラブ系の男性に親切にしてあげたんだって。その男性は「親切にしてもらったお礼にいいことを教えてあげる。クリスマスイブの24日に福岡の天神地区に近づかないほうがいい。テロが起こるから。」と言われてたらしい。半信半疑で警察関係の人に聞いたら、「その情報は警察も把握しているが、公表するとパニックになるから、あえて公にしていない。だから皆さんがたくさんの人に知らせてやってほしい。」と言われてたんだって。だからクリスマスイブには天神に近づかないほうがいいらしいよ。

ちょっと聞いただけでは本当のようにも思えますが、不自然さもありません。調べてみると、これはまったくのデマで、同じような話がメールを使って全国各地で何度も流されている、しかもこの種のデマに「アラブ人の恩返し」という差別的な通称がつけられているということもわかりました。

デマが流れる背景

こんなデマがすぐに広がる原因の一つとして携帯電話の普及があげられると思いますが、それ以上に外国人、とくにアラブ・アジア系の人に対する偏見が根底にあるからではないでしょうか。

確かにアラブ系の人引き起こすテロ事件や、アジア系の人日本国内で起こす犯罪事件がないわけではありません。かと言って、「アラブ系の人＝テロを起こす人、アジア系の人＝犯罪を犯す人」ではないことは当然のことです。にもかかわらず「テロや犯罪を起こすのはアラブ系やアジア系の外国人だ」という思いこみ、言い換えれば差別意識をわたしたちは自分自身のなかに知らず知らずのうちに刷り込んではいないでしょうか。そんな素地があるからこのようなデマを疑問を持たず信じ、広げていくのだと思われま。

ちょっと考えればおかしいとわかる内容でも、それが漠然とした不安感や偏見、差別意識などを持った心の中に投げ込まれると、冷静な判断力を失わせてしまいます。うわさ話にとどまっているデマでも、なにかのきっかけで社会に大きな混乱を起こす危険性ははらんでいます。今から83年近く前の関東大震災の混乱のとき、悪質なデマによってたくさんの朝鮮・中国人が殺されたことはよく知られています。また沖縄での地上戦の最中に、沖縄の方言を使った住民がスパイだとされ、味方であるはずの日本兵に殺された例もあります。一人の人間が瞬時にたくさんの人に情報を伝えることができる現代では、デマによって混乱する危険性はいつそう大きいと言えます。

情報を疑い、思いに近づく

間違った情報は差別・偏見・思い込みの心の中に容易に入り込みます。そしてそれがまた偏見を助長し、間違いを発信するという悪循環を生んでいます。この悪循環を断ち切るためには、どんな情報でもまず一度は疑ってみる姿勢、そしてその情報で話題になっている人（たち）の思いに近づこうとする姿勢が大切ではないでしょうか。このことは部落問題をはじめとするさまざまな人権問題、差別問題を考えるときにも必要なことだと思います。

（文：古賀）

一コマ 人権のまちづくり

人権のまちづくりには若者の力が必要だといわれています。若者不足が嘆かれているのですが、我が小郡市の人権センターには、まさに若い力がひとつ、お土産を抱えて飛び込んできました。彼が抱えてきたお土産は、「てんつくマン」というアーティストの名前とこの人が創った映画主題歌のCD。今回は、わざわざ人権センターに「市民のみんなでこの人の話を聞き、みんな映画を観たい」と、「てんつくマン」の存在を知らせに来てくれたMさんご自身、「てんつくマン」とその映画との出会いや魅力について書いていただきました。

僕がてんつくマンを知ったのはたった一枚のCDからでした。友達がてんつくマンの映画を観たらしく、今まで見たこともないような顔を「聴いてみてん。めちゃいいばい。特に8曲目！」と言って渡してくれたのが映画の主題歌等を歌っている「まーちゃん」のCDでした。そのCDを早速聴いてみると、車を運転していたのにもかかわらず、涙を落としている自分がいました。「何でこんなに心に響くんだろう」と思い、その歌を聴いている間に頭に浮かんだ人に聞いてもらいたいと思い、CDを渡しました。

それを聴いてくれた先生もその歌詞の内容に大変興味を持ってくれ、しだいでてんつくマン自身に対しても興味を持つ人の輪が広がっていきました。インターネットで調べるうち、てんつくマンの映画を観る機会があるということで、福岡までその何人かで観に行きました。

映画を観てまず強く思ったことは、一人の力ではできないことも、その一人ひとりの力が合わさればその想いも大きなものとなり、可能になるという事。人間・命の大切さ、人と人のつながり、など、いろんなことを考えさせられる映画でした。

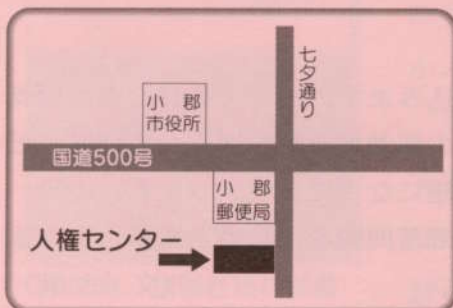
何かに自信を持ってない人、前向きに考えることができない人、元気が出ない人、何かに向かって行動したいけど悩んでいる人達全員に観て欲しい映画です。
(文：Mさん)



投稿原稿募集

これまで、OH! RECを身近なものに！という気持ちで、市民の皆さんから頂いた人権に関わる情報を手がかりにしながら、センター職員が原稿をつくってきました。そうした中で今回は、初めて市民の方の投稿を掲載させていただきました。

今後ますますOH! RECを市民の皆さんとともに充実させていきたいと考えています。そこで、人権のまちづくりにかかわる投稿を募集します。原稿採用の判断は、OH! REC編集会議におまかせいただくこととなりますが、ふるってご応募ください。



小郡市人権教育啓発センター

所在地：〒838-0141 小郡市小郡296
でんわ&Fax：0942-80-1080 (直通)
E-mail：oh-rec@iwk.bbiq.jp